# Vectoria

鷹村柚希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｖｅｃｔｏｒｉａ

【Ｎコード】
Ｎ４８３７Ｐ

【作者名】
鷹村柚希

【あらすじ】
「君には選択肢が二つある」――見知らぬ不可思議な空間、現れた一つの人影は――「このまま死んで、他の死者同様転生を待つか。あるいは、私の依頼を請けるか」――青年に二つ選択肢を与えた――うっかり死んでしまった大学生月見里司は、自称神の依頼を請け、チート能力を授かって異世界へ旅立った。◇◇◇処女作です。お暇がありましたら、少しでも覗いていただけたら嬉しいです。※現在今後の展開がうまく纏められず、更新が停滞しています。ご迷惑をおかけして申し訳ありません。いずれ再開致しますので、それまで

お待ちください◇◇◇

## ■一話（前書き）

何卒、よろしくお願いします。

## ■一話

皆さん、こんにちわ。初めまして。

僕の名前は月見里（ヤマナシ）　司（ツカサ）。十九歳。大学二年。

テンプレチックな言い方をすると、どこにでもいるような極普通の一般人。

趣味がゲームや漫画や某笑顔動画だったりするけど、本当にどこにでもいる普通の人間。

ビバ☆オタク文化。

さて、現在、僕は今までの記憶の中でも前代未聞且つ究極に面倒臭い出来事に巻き込まれていると言えます。

え？何故って？

知るかボケ。

駄目だ、とりあえず落ち着こう。混乱するのは仕方ないけど、これじゃ埒あかん。

落ち着けー。深呼吸して素数を数えよう。

しかしなんでこうゆう時って素数なんだろうか。

正直未だに自分は素数と言われると咄嗟に1しか出て来ないんだけど。

つーかパニクッてるとはいえ、大学生としてどうなんだこれ。

落ち着くもんも落ち着かんよ。

てゆうか1って素数じゃないじゃん！
本当に大学生としてどうなんだよこれ！

……まあ考えてたって埒あかんし。
とりあえず周りを確認して見る。

なんかもうね、辺り一面、紙。本当に紙しかない。
それも馴染みのあるプリンタ用紙みたいなのじゃなくて、羊皮紙みたいな長いヤツ。
それらには必ず何かしら書かれてて、それぞれ空中で漂ったり滑走したりしてる。
ちなみに床はないけど何故か足裏には硬質な感触があって、足の下でも大量の紙が滑走している。

そして目の前に、人影が一つ。

そう人影。

目も鼻も口も見当たりゃしない。
人の形をした黒いもや的な何か。
そんなもんが目の前にいる。

正直夢としか理解しようがないんだけど、どうしたもんかね、これ。

「なんだ、反応薄いねぇ。ま、実際はそんなもんか」

目の前の人影は、のんびりとした雰囲気でそうのたまった。

そして僕は、目の前の人影に真っ先に言うべき言葉を口にする。

「……中二病なの？」

「ちげーよ。ちなみにその質問をしたのは君で二人目だ」

人影は面白くもなさそうに頬杖をつく。

ちなみに、何故僕がこんな発言をしたのかと言うと、目の前のこいつが「私は神だ」とかぬかしやがったからだ。
この場合、失礼極まりないがそう訊き返した僕に罪はない。

だってありえん。信じられるわけないし。
そしてできることならお近づきになりたくない。
頭の中が夜〇月な人影とか厄介にも程があるわ。

病院行った方がいいぞ。主に頭の。

てか同じこと言った人いるんだ。無理もない。

「ま、今回は別に無理にでも認めてもらう必要はないんだけどね。
今君に必要なのは、今自分がどうゆう状況にあるのか理解してもらうことさ」

「はぁ？」

話に流されてたまるか。

そんなことを思った僕は、咄嗟に疑問詞を口にする。
正直こんな得体の知れない輩の話に流されるのはなんか癪に障る。
てゆうかひじょ〜〜〜に癪に障る。
こっちも話をさせろ。僕の言いたいことも聞け。

お・れ・の・は・な・し・を・き・け！

「ちょ、待ってって。理解も何もわけわかんないし。てかあんた誰？ここどこ？」

「まあまあ、順を追って説明するから。……ちょいと失礼」

「いや、ちょ……う〝っ！」

言いかけた僕を無視して、何か黒い物がベシャッと両目に被さるように張り付いてきた。

何これでかいキクラゲ！？

そして次の瞬間、天地が一転した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ゆっくりと目を開けると、そこには普段よく目にする蛍光灯と天井があった。

そのまま、僕は身を起こす。下には皺だらけのシーツを被った敷布団がある。
周りを見回すまでもない。
そこは紛れようもなく、自分の住んでいるマンションの一室だった。

……何これ、どゆこと？

夢オチ？夢オチかこれ。

「この日は日曜だったな。バイトもない久々の休日だってことで、君は寝てたわけだ。ちなみに時刻は午後五時過ぎ。……さすがに寝過ぎじゃね？」

現実かよチクショウ。

てか、あんたどこいんの？
不法侵入じゃね？
てかなんぞこれ。

「君の真ん前にいるよ。……まあ、そんなことはどうでもいいよ。今の状況と今君が見てる光景は、全く別の物だから。幻覚みたいなもんだよ。だから不法侵入ではない。断じて」

いや、最後んとこ強調しなくていいから。

てゆーか、この程度で寝過ぎとか言うなよ。
僕が本気で寝れば三十時間は平気で寝続けられるとだけ言っておこう。

「自慢になんないってそれ。んな一気に寝て一気に起きるような生活すんなよ。体壊すぞ」

うっせーほっとけ。

「……まあ、いいや。とりあえず君は、目が覚めてまず時間を確認した。それから、喉が渇いたから、冷蔵庫に飲み物を取りに行ったわけだ」

すると体が起き上がる感覚がして、足が勝手に冷蔵庫に向かって行った。

幻覚みたいなもんって言ってたけど、ずいぶんリアルな幻覚だな。
ゴースト○ックか。それとも写○眼か。

勝手に動く僕の体は冷蔵庫からリ○トンのレモンティーを取り出し、そのままごっきゅごっきゅと飲み始める。

おお、味までするよ。

ちなみに僕は飲み物の中ではレモンティーが一番好きで、一日につき５００ｍｌペットボトル二本消費している。
リ○トン最高。

午〇ティーじゃ駄目だ。リ〇トンがいいんだ。

「で、君はその後ベランダに出た。特に意味はなかったと思う。寝起きだし。風にでも当たろうと思ったのかもしんないね」

僕はペットボトルを片手にぶら下げてベランダに出た。

……うわまぶしっ。

「まあ、そんでしばらく君はボーッとしてたわけだ。眩しいからかわからんけど、ベランダの柵に寄り掛かる形で。……さて、ここまでは特に問題ないな。だが、ここで問題発生だ」

え、何？問題？

頭の上にハテナマークを浮かべていると、一際強い風が吹いて、次いで右耳に女性の声が飛び込んで来た。

「あっ、あー待ってぇ！」

お、この声は隣の奥さんじゃあないですか。

お隣さんは先月引っ越してきたばかりの新婚さんで、夫婦共にかなり若い。

特に奥さんなんて僕より年下なんじゃないかと思うぐらいだ。

そんな若奥様の声に振り向くと、突風に煽られて一枚のタオルが目の前を横切って行った。

取り込もうとした洗濯物が飛ばされたのかな？

「よっと」

咄嗟に宙を舞うタオルに手を伸ばす。
が、届かない。僕の右手は虚しく空を掴んだ。
寝起きで眼鏡をかけていないから、距離感がいまいち掴めない。

「ああ、くそっ」

そのまま身を捻ってさらに手を伸ばす。
よし、今度はちゃんと掴まえられた。

しかしホッとする間もなく、グラリと平衡感覚が狂う。

「え」

え。

何。

これ。

右手は掴んだ洗濯物。
左手にはリ〇トンの飲みかけのボトル。
両足はベランダの床に……

……着いてない。

体は半分以上ベランダの柵を越えていて、既に落下が始まっている。
確認できたのは、奥さんの悲鳴と、急速に遠ざかる自分の部屋のベランダ。

そして———

「そこまで」

その声に、ハッと目が覚める。

目の前にあるのはさっき見た、非現実的な空間。
そして、自分の顔からゆっくりと手を離す人影。

さっきの黒い物体はこいつの手か。
新手のキクラゲかと思った。

「……」

僕は自分の体を見下ろす。

五体満足。
生きてる。

「言ったけど、さっきのは幻覚みたいな物だよ。今の君に影響があるわけじゃない。ただ、君が見た物、あれは紛れようもない現実さ」

人影は僕から数歩離れると、おもむろに、ピ、と僕を指差した。

「君は死んだ。そうゆうこと」

## ■二話

「君には選択肢が二つある」

人影は右手の指を二本立てて、僕の方に突き出して見せる。
この場にカメラがあれば、なんか真っ黒いのが無駄にカッコつけてVサインをしてるような写真が撮れることだろう。

「このまま死んで、他の死者同様転生を待つか。あるいは、私の依頼を請けるか」

人影はそこまで言って、反応を見るようにじっと僕を見つめる。
と言っても目なんてないんだけど。

あー……てゆうか、本人大真面目なとこ悪いんだけど……

「えー……めんどくさ」

僕の反応に、人影は怪訝そうな表情を浮かべる。
と言っても顔なんてわかんないんだけど。

「なんかホントに反応薄いねぇ。自分が死んだなんてわかったら、普通はパニックになったり、絶望したりしそうなもんじゃない？」

ごもっとも。

しかし、今の僕は自分でも驚く程冷静だった。

「そんなん言われても、事実なんでしょ？だったらさ、あれこれ騒いだところでどうにもならないじゃん」

僕の言葉に、人影は何やら考えるような素振りを見せる。

そして、今までの真面目な雰囲気とは打って変わって、ニヤリと黒い笑みを浮べた。

何度も言う通り、こいつに顔なんてないんだけど、何故だかさっきから表情がわかる。

「なるほど。どうやら君は当たりのようだ」

何、当たりって。

「君が死んじゃったのはシャレにならん事実だし、こっちは頼み事する側だからなるべく真面目でいようかと思ったけど、そうゆう必要もなさそうだね」

人影は一層笑みを深くすると、いきなりバッと両手を広げた。

なんか今にも「人、ラブ！」とか言い出しそうだ。

新宿の情報屋さんですか、あなたは。

「さあ、詳しい説明をしようか！

君は死んだ！そして君には二つの選択肢が用意された！

一つはこのまま死者として転生を待つこと！

もう一つは私の要求を飲み、異世界へ旅立つこと！
……ちなみにここは所謂神ワールドだ。理解したか？」

この人（影）、急にテンションあがったよ……
何これ怖い……

「要はこのまま死ぬか異世界で生きるかだ！今の君はまさにＤｅａｄ ｏｒ ａｌｉｖｅ！Ｔｏ ｂｅ ｏｒ ｎｏｔ ｔｏ ｂｅ！全ては君次第だ！！」

うわぁ、なんかこの人すごく関わりたくない。
痛いよー、痛いよお母さーん。
ここに頭怪我した人がいるよー。
バンソーコー持って来てー。
人一人包めるぐらいのー、大きいヤツー。　（●魂っぽく）

てかＴｏ ｂｅ ｏｒ ｎｏｔ ｔｏ ｂｅて。
僕はハムレットじゃないっつーの。

「……拒否権は？」

全く期待はせず、一応そう聞いてみる。

「拒否するとなると、自然と死っつーか転生を選択することになるねぇ。元の世界じゃ君死んじゃってるし、甦生はさすがにする気は

ないし。つーかもう君の身体火葬されちゃってるしね」

「マジか……」

別にどうと思ったわけではないけど、一応口ではそう言っておく。

てか火葬されてるってことは、死んでから結構経ってるのか……

「てゆうか要求って？異世界へ旅立つって何？」

「ああ、うん、それね。端的に言うと、魔法溢れるファンタジーな世界で勇者をやってもらいます」

わーお。なんとゆうベタな展開。

テンプレ？何それ寺のこと？……それはテンプルか。

「ちなみに君には現地住民にはない特殊能力あげるから、一応生きていくのには困らないと思うよ」

「えーでも……僕なんかに務まるとは思えないんだけど」

前も言ったが、僕は本当に極普通の一般人だ。

なんか特殊能力をくれるとか言ってるけど、いきなり異世界に飛ばされて救世主よろしく活躍できる自信はほとんどない。

むしろ全くない。

「だぁいじょおぶ。人間ってのは思いの外タフなもんさね。それに君なら大丈夫さ。これは確信できる」

「そんなん言われても……てか何が大丈夫なの。根拠は？つーか何

基準で選んだわけ？」

一般人が勇者に選ばれて異世界へ飛ぶなんて話は腐る程ある。
そして基本的に選ばれる人間は、本当になんの能力もない一般人か、あるいは元の世界でも一風変わった能力を持っているかの、どちらかが多い気がする。

そして僕は紛うことなく前者だ。
だったら自分が選ばれた理由を教えてもらおうじゃないの。
なんの能力も持たない一般人なんて、それこそ腐る程いる。

もしかして、適当とか言わないよな……？

「君を選んだ基準？ああ、適当。てかたまたま」

言われちゃったよ！！
もしかしなくても適当だったよ！！

「……まあ、あれよ。私の管轄する世界の一つにさ、勇者的な人を送り込む必要が発生しちゃったのよ。向こうの住民に勇者的な能力持たせても上手くいくかわからんし、別世界の住民に能力与えてただ召還するってのは、その人の人生を無視することになるから、ハッキリ言って好かん。だから、こんな言い方すんのも悪いけど、丁度いいタイミングで人生終わった君にお鉢が回って来たわけさね」

こいつぁヒデェ。

……とは言わない。

目の前の人影の言うことは、一応ちゃんと理には適っている。

別世界から誰かしら召喚するにしても、平凡に暮らしていた人間の人生を勝手な事情で捻じ曲げるのは正直いただけない。

それだったら、すでに人生が捻じ曲がりようがない人間を選べばいいとゆうことだ。

例えば、もう死んでるとか。

まあ、実際僕はもう死んじゃってるんだし、要求を飲んで第二の人生歩んでもいいかなぁ……

でもなぁ……

「……特殊能力って、どんなの？」

ある意味問題はそこだ。

何かしら能力をもらえたとしても、扱いきれなかったり微妙なものだったりしたら、

生きて行ける自身はない。

面倒な解説を覚悟していたが、人影のした説明は実に簡潔だった。

「全部」

……Ｗｈａｔ？

「……はいぃ？」

なんか杉下〇京さんみたいな声出た。

「だから全部」

「ちょ、意味わかんない。何、全部って。何の全部よ」

すると人影は僕を指差し、ちょいちょいと指を上下に揺らした。

「君の知ってる能力全部。ちなみに二次元含む」

なん……だと……？

僕は慌ててその発言を聞き返す。

「え、何それ、マジ？」

「大マジよ。嘘はつかん。厄介な仕事頼むんだし、これぐらい当然」

……つまりあれか？

もしこの依頼を受ければ、僕はカ○ハメ派とか超級○神覇斬とか
エターナルフォース○リザードとかが使えるようになるってこと？
てか伏字が追いつかん。

「あ、ちなみに知ってる物以外でも、想像した技とか術でも大体使
えるよ。どんな魔法も使えるし、どんな武器でも創れるし使える」

……チートにも程があるだろ。

「で、請ける？」

正直それでも即決するわけにはなぁ……

「じゃあ死ぬ？」

間違っちゃいないけど言い方が怖いよ！
端から見たら明らかに危ない人だよ！
いや、既に危ない人だけどさあ！（主に頭が）

「うーん……まぁ、もう死んでるし……でもなぁ……」

「ちなみに強制ではないよ。このまま無難に生まれ変わるのを待つ
方が、確かに幸せかもしれないし」

確かにそうかもしれない。
もし仮に依頼を受けたとして、どんな波乱に満ちた人生が待ち構え
ているのか、わかったもんじゃない。

ム〇カみたいなハタ迷惑な奴が世界征服を企むかもしれないし、某ビビンバの名前の魔王が攫った桃姫を助けに行かねばならなくなるかもしれない。

正直、そんなことになったら非っっっっっ常〜〜〜〜〜〜に面倒臭い。

……でもなぁ……

「……請ける」

溜息混じりにそう宣言する。

平穏な生活に未練がないわけではない。

だが、異世界トリップに憧れないわけでもなし。

それに自身はもう死んだ身だ。

せっかく与えられた選択肢だ。第二の人生を謳歌しようじゃないか。

歌にもあるだろ？

『人生は二度まで　誰か俺に火を貸せよ』

え？知らない？てゆうか使いどころがおかしい？

いいじゃん別に。

「おっけ。恩にきる」

こうして、僕の次の人生は選択された。

## ■三話

「そんじゃま、早速能力の方を添付しようか」

そう言って、自称神の人影は僕の方へスッと右手を差し向ける。

しかし添付って……メールに写真載っけるようなもんか？

案外簡単に能力とやらは付けられるらしい。

それでもさっき死に際を見せられた時みたいな不意打ちはごめんなので、一応心の準備はしておく。

実際、チート能力を手に入れられることに浮かれていないと言えば嘘になるしな。

浮かれて床を踏み抜いて大怪我するような目には遭いたくない。

「君に能力が入るのは一瞬だけど、かなりの情報量だから、その一瞬だけでもそれなりの負荷がかかると思う。どうなるかはわかんないけど、数秒意識が飛ぶぐらいのことは覚悟しといて。それから、倒れそうになったら無理せずそのまま倒れなさい。立ったままの方が危ないし、ここ床ないから痛くないし」

……どうやら案外簡単なのではないらしい。

しかも不意打ちどころの話ではないらしい。

自称神は僕の返事を待たずに、実に楽しそうに両手を振り上げた。

「それじゃあ、いくぞ！　　パヰルダーオン！！　　」

ちょっと待て！そのネタは最近の子には通じないぞ！

しかし、そのツッコミどころ満載な掛け声と共に真っ黒な両手が振り下ろされた瞬間、

雷が　落ちた　。

そう錯覚する程の、轟音と閃光。

……しかし、予想に反してその衝撃は極小規模の物で、一瞬後には視覚と聴覚は実にクリアな状態に戻っていた。

……何これ、身構えて損した気分。

目の前では、自称神が驚いたような雰囲気で立っていた。

「……あれ、大したこと無さ気？」

うん。超ピンピンしてる。

「へぇー……どうやら当たりどころの話じゃないね。面白くなってきた」

……なんだよ面白くなってきたって。

あとニヤニヤすんな気持ち悪い。いや、顔はないんだけどさ。

「なんかなんともなさそうだし、さっそくだけど力を使う練習してみようか。……そうだねぇ、じゃあまずは君の眼鏡を出してみよう」

え？と思って顔に手をやると、確かにそこに愛用の眼鏡の存在はなかった。

そう言えば死んだ時と同じ状態でここにいるなら、眼鏡はかけてなくて当然だ。

随分視界がクリアだから気が付かなかったけど。

……あれ？

「あのさ、今眼鏡かけてないのに視界めっちゃクリアなんだけど」

「ああ、君が今魂の状態だから。異世界に飛ばす時に新しい肉体に入れるんだけど、そしたら視力は戻っちゃうから眼鏡は必要だよ。」

マジか。視力補正ぐらいしてくれたっていいじゃないの……

まあでも、いきなり体質が変わっても違和感あるから、それでいいか。

「さて、君の能力に必要なのは基本的にイメージ力だ。逆に言えば、イメージさえできればほぼなんでもできる。ただ、あくまで『ほぼ』だ。死者の蘇生とかは無理。……それじゃ、君の好きなように眼鏡が現れることを想像してごらん」

やれやれ、面倒な……

まあ、能力使うのは初めてだし、変に凝る必要はないかと、僕は愛用の眼鏡が特にエフェクトもなく湧いて出る様を想像する。

すると、想像した通りに、自分の眼鏡が目の前に現れた。

……おお、便利。

手に取ってまじまじと見つめてみる。

見ようによっては伊達眼鏡にも見えなくもない、黒の少し太めのフレームのオシャレ（笑）眼鏡。

大学入学の少し前に、イメチェンよろしく買い換えた物だ。

かけてみると、しっくりと自分の顔に収まる。

うん、紛れもなく一年半連れ添って来たＭｙ眼鏡だ。
自称神の人影に目を向けると、やつは満足そうにうんうんと頷くいておもむろに右手の親指を立ててグッと前に突き出した。

「眼鏡男子萌え！！！」

どーでもええわ！！

ある種のトラウマワードを口にされて額に青筋を浮かべながら、僕は人影に……いや、自称神に……いや自称神の人影……僕は新世界のかｍ

ええいもう面倒臭ぇ！

「その発言には一先ず目ぇ瞑っとくけど……あのさ、なんて呼べばいい？」

「あん？」

サムズアップしていた手で自分を指差し、首を傾げる黒い自称神に、「そうや、お前やお前」と思いながら頷いて見せる。

「うーん、正直なんでもいいんだけど……人によっては創造神（クリエイター）やら全能神（オーバーロード）やら呼んでくれてたりするんだけど……ああそうそう、私に中二病かと訊いたもう一人は、私のこと『クリエイター』って方で呼ぶよ」

……それは言外に『クリエイター』って呼べってことか？

にしても大層な名前……ってかこれ名前なのか？

神だからそんなもんなのかもしれないけど。

……なんか要求通りに呼んでやるのも癪だな。

「……モノ」

「お？」

「あんたの外見と、この空間の対比で『モノトーン』から『モノ』。もしくはギリシャ語の一（モノ）。神なんだし、始まり的な意味で」

安直な名前だけど、響き的には悪くないからまあよしとする。

自称神はキョトンとしたような顔（ないけど）を僕に向けると、

にわかに笑い出した。

え、何、今の発言に笑うところあった？

しばらく困惑していると、自称神は気が済んだのか笑いを治めた。

「……いやー、君最高。そんなん言われたの初めてだわ。オッケー、いいよ。君は私のこと『モノ』って呼びなさい」

こうして、僕の中で自称神の呼称は、めでたく『モノ』に決まった。

……こいつの笑いのツボわからんよ。

「じゃあ、遠慮なく。それはそうと、まだ聞きたいことあるんだけど。僕が行く世界ってどんなところ？」

ファンタジーとは聞いたから、魔法とかあったりするんだろうか。あと魔族とか精霊とか。

「あーうん、あのね。割と典型的なファンタジー世界だよ。中世ヨーロッパな感じで、魔法とか精霊とか魔族とかある」

わーお、そこまで露骨にわかりやすいと逆に楽しみだよ。

「具体的には？」

「まず大まかに分けて、人間と魔族と精霊が存在する。それぞれの中からさらに細分化したり、もっと細かい種族とかいるけど、そこは割愛。で、この世界には大陸二つあって、それぞれ人間領の『アスタロッド』と、魔族領の『ダリアルク』って呼ばれてるね」

「精霊は？」

「精霊は領土を持ってないよ。強いて言うなら、精霊は自然そのもので、精霊の寄り付かない場所は衰退する。普通の人には見えないけど、精霊に好かれる素質を持った人は精霊が見えて、且つ精霊の協力を仰ぐことができる。これが俗に『精霊術』と呼ばれる」

「自分の魔力を使うのが魔法で、精霊の力を使うのが精霊術ってこと？」

「そうゆうこと。いきなり精霊術の話しちゃったけど、魔法については説明いらないよね？君が言った通りの物だから、多分君が想像してるとだいたいあってると思うし」

「魔法って人間にも使えんの？」

「使える使える。まあ、人によって向き不向きはあるけどね。魔族だって、魔力はあれど、全部が全部魔法を使えるわけじゃないし」

「ふーん」

「あと、魔族の低級のやつで魔物って呼ばれてるのがいてね。人間の方に当てはめると野生動物みたいなもんだけど、凶暴なやつが多いから注意してね」

「……面白みがないくらいテンプレなんだ。で、人間と魔族ってやっぱり対立してんの？」

「まあねー。現在戦争真っ最中のはずよ」

「えー、マジかよ……まあ、でなきゃ勇者とかいらないか」

「……まあ、大雑把にはこれだけわかってればなんとかなるでしょ。細かくは現地住民に訊いとくれ」

……なんか、今妙な間があった気がする。

なんだ、勇者ってワードか？

でも確かこいつ最初に自分で「勇者をやってもらう」って言ってたよな。

「……で、僕はそこで何すりゃいいの？当然魔王とかいるわけでしょ？倒しゃいいわけ？」

「そこは君の自由だ。君の好きにしなさい」

え、何それ。

「魔王倒したりしなくていいの？」

「うん。君がしたいならいっそ魔族側に付いてもいいし、普通に魔王倒してもいいし。どっち付かずで傍観者気取るもよし、両者共滅ぼしてもよし」

おいおいおいちょっと待て。

「え、ちょ、何それ。それって僕がどうするかで世界の命運決まるみたいじゃん。てか僕勇者なんだよね？神が勇者に魔族に付けとかどっちも滅ぼせとか、わけわかんないんだけど」

僕の言葉に、モノは今までとは打って変わって神妙な顔（だからないけど）をする。

今までの飄々とした雰囲気との差に思わず黙り込むと、モノはゆっくりと口を開いた。

「実は私は、君に一つだけ嘘をついている」

正直、逆に今まで嘘じゃないことの方があるのかと思うような話なのだが、今更なのであえてツッコまない。

いきなり変わったモノの雰囲気に呑まれて、何も言えなくなってしまったというのが本音ではあるのだけれど。

「君がなるのは勇者じゃない。

神だ」

## ■四話

……話を整理しよう。

モノが言うことには、奴は僕に一つ嘘をついていたらしい。

当初モノは、僕を勇者をして異世界に送ると言っていたが、本当は僕を『神』として送るらしい。

ちなみに勇者は既に別にいるとか。

いや神はあんたじゃないのか、とも思ったが、モノ曰く、モノ自身は神として特殊な立ち位置にいるらしく、一般的に認識されている神のように、何かを司ったり奉られたり崇められているわけじゃないらしい。

そもそも、モノという（名付けたのは僕だけど）神の存在すら、知る者は極一握りしかいないらしい。

それはともかく、モノは僕を『一般的に認識されている神』として送り出すとのこと。

ちなみに僕が今から行く世界は、多神論的な考えが一般的らしい。

そして僕がなるのはその世界では伝説の神らしい存在で、過去に一度だけ人間と魔族の戦争中に現れ、戦いの勝敗を意のままに操ったとされるらしい。

その際、その神が味方に付いた軍が勝利を収めていたため、今では『勝利の神』だとかなんとか言われてるらしい。

それ以来、人間と魔族間で戦争が起こる際には、軍の出撃の際には必ずその神に祈りを捧げ、劣勢に陥った際には『勝利の神』召喚の儀式が行われるらしい。

ちなみにその儀式とやらは、必ずその神が現れたとされる時間に行われるらしい。

いや、召喚やってる暇あったら策でも練れよと思うが、モノ曰く、その辺はちゃんと役割分担がされているらしい。

……正直、伝説とはいえ、神とはいえ、不確定なものにここまですがっていいものかと思う。

そして、今回の戦争はどちらが劣勢というわけでもなく、どっち付かずのジリ貧な戦況がダラダラと続いているらしい。

そこで、もうとっとと決着を付けたい、と、人間側と魔族側で同時に召喚が行われるらしい（半ばヤケクソ気味で）。

そして、言い伝えられているその神の唯一の特徴が、黒髪だということらしい。

結論。

「面倒臭ええええええええええええええええええええええ！！！」

何これいじめ！？面倒臭いことこの上ねぇよ！！

勇者やるってだけでも厄介ごとだなぁと思ってたのに！承諾したけど！

あんたねぇ！人間と神やるんじゃ差があり過ぎるんじゃないの！？
チート能力貰ったとはいえ割りに合わんわ！
つーか性に合わんわ！！

何、僕このままじゃ行った先で神の如く崇められちゃうわけ！？
いや、実際神らしいけどね！

そんで全くの無関係の戦争に駆り出されるわけ！？

無理無理無理！ありえん！無理！！

先生！今ここで　Ｉ☆ＪＩ☆ＭＥ☆　が行われています！
……え、何？知らない！？いじめは存在しませんでした！？
えぇい！教師はいつだって保身に走りやがるよコノヤローーー！！
いじめが発覚すると自分に責任が降りかかるから、常に見て見ぬフリだコノヤローーー！！

「……あったの？いじめ。まあそれはともかく、そうなるよね、普通は。だから私はさっき言ったんだ。

『君の好きにしなさい』

って」

……え、なんでそこでそれに繋がるわけ？

「人間側と魔族側に同時に召喚されるから――――もとい、人間側と魔族側で君を取り合うから、好きな方を選びなさい。んで、好きなように振舞いなさい。

さっきも言ったけど、

いっそ魔族側に付いてもよし。

普通に魔王倒してもよし。

どっち付かずで傍観者気取るもよし。

両者共滅ぼしてもよし。

甘ったれた住民達が伝説の神に頼り切って私利私欲のことだけ考えるようなら、わざわざそんな奴らの欲求に答える必要はない。君は私があげた能力で、好きに生きなさい」

……非っっ常～～～～～～～～に有難いお言葉ではありますが、それは神としてどうなんでしょうか。

責任とか、あるんじゃないでしょうか。

実際どうなのよ。

てゆうか……

「言わずもがな、か……」

「そ。自由に責任は付き物さね。むしろ、だからこそ自由にさせるなんてハイリスクを負える。

君は自由に生きなさい。

それが世界にどんな影響を与えるのか、ハイリスクに対するリターンはそれだ。君は、結局は君が影響を与えた世界で生きなきゃならないからね。君にとって自由の責任はそこになる」

そこまで言うと、モノはポンと僕の両肩に黒一色の手を乗せた。

「……ま、とは言えそんな気に負いなさんな。最初っから全部理解するのも、全部覚悟するのも無理なんだからさ。最初はひたすら必死に生きてなさい」

そう言ってにっこりと微笑むモノ。顔はないけど。

そして僕はというと……

「ん、そっか……わかった」

「別に辞退しても構わないんだよ？」

「いや、行くよ。一回請けるって言ったし。ただ……」

「ただ？」

「一発殴らせろやあああああああああああああああああああ！！

！」

喰らえ！！僕の痴漢撃退用必殺右ストレートを！！

「ぐほあっ！！」

もろに僕の必殺右ストレートを喰らったモノは、綺麗な放物線を描いて吹っ飛んで行く。

まったく、厄介過ぎる依頼請けさせやがって！
朝鮮海苔切り抜いたような外見いてるくせに！
いや、自分で請けたんだけどね！請けるかどうか確認もしてくれたけどね！

ちなみに、何故痴漢撃退用なのかは訊かないでほしい。

……さて、いささか理不尽なことをしてしまったような気もするけど、この際無視だ。
依頼請けてやるんだから、これぐらいしても許されるはず。

まあ、確実に危ない依頼とはいえ、死んだのが手違いじゃなかっただけマシか。
もしそうだったら加えてアッパーと延髄蹴りとダブルラリアットかけても足りないぐらいだ。

「……おー痛て……やれやれ容赦ないねぇ。ま、こんだけ元気なら心配ないか」

ありまくりですとも。

もし容赦なかったら、チョークスリーパーと嫁の原爆固めと一本背負いとジャイアントスイングと雪崩式リバースフランケンシュタイナーと（ｒｙ

それに異世界行くのに心配ないって方がおかしいじゃないか。

「まあいいや。じゃ、さっさと送っちゃおう。詳しい状況は現地で訊きなさい」

ええええええええええまあいいやって酷くない！？

そしてなんか無責任な発言が！

「ま、大目に見てよ。なんかあったら追々連絡するから。それじゃ」

モノが吹っ飛んだ位置のまま僕に笑いかけると、

「行ってらっしゃい」

床が抜けるような浮遊感と共に、僕の視界は黒く染まった。

## ■四話（後書き）

四話目にしてようやく異世界に旅立たせることができました。

何コレ長ぇよ！！

神でしゃばり過ぎ！！

こんな小説ですが、今後トモヨロシク……

## ■五話（前書き）

今回は司君以外の視点です。

## ■五話

side：勇者クリス

儀式の時間が刻々と近づいてくる。

大陸『アスタロッド』に存在する人間の王国『ベルベドール』。

その王国に仕える勇者、クリストフ・ミハエラ・シュヴィエは、着々と召喚の準備が進められる儀式の間で、緊張の面持ちで佇む幼馴染に優しく声をかけた。

「大丈夫だ、きっと上手くいく。君ならできるさ」

幼馴染の少女は、そわそわと落ち着かない様子でクリストフを見返す。

少女の名前は、マーガレット・ティオ・エリザベス・ベルベドール。

王国ベルベドールの第一王女であり、その類稀なる魔術の才から、今回の『召喚』では彼女が召喚に必要な魔力の主軸を務めることになったのだ。

言うなれば姫巫女である。

安心させるようにクリストフが笑いかけると、彼女は逆に困ったように目尻を下げた。

「でも私、『召喚』の儀式は始めてなんですもの。上手くやれるかどうか……今までと同じように、召喚に応じていただけないだけならまだいいのですが、万が一魔族側が召喚に成功してしまったらと思うと……」

今回の『召喚』は、人間側と魔族側で全くの同時刻に行われる。

これは前例のないことである。

今までの『召喚』は常に戦況が自分達にとって不利な状況になった際に行われた。

しかし今回の戦争は、お互いにとって有利でも不利でもなく、これまた前例がない程のジリ貧の戦況であった。

そこで行われるのが“同時召喚”である。

始まりは、現在の戦況を打破する策はないかと、国王が半ばヤケクソ気味で『召喚』を決定したこと。

その情報が何故だか魔族側にも伝わり、魔族側も負けじと『召喚』を決行するらしい。

元々、人間魔族共にいたちごっこのような現状に辟易としていたところであった。

そう言った理由から、『同時召喚』は決行されることになった。

「もっと自身を持つんだ、マギー。君の実力なら、俺達にとって悪い状況にはならないさ。神はきっと、俺達の味方をしてくれる」

「クリス……」

クリストフとマーガッレトは、幼馴染ということがあり、非常に仲がよかった。
幼い頃は周囲の目も気にせず、歳相応に遊んだものだった。

しかし、どれ程仲がよかろうとも身分の差は二人にとって障害になった。
一介の騎士の家系の出でしかなかったクリストフは、王女であり幼馴染であるマーガレットを支えたい一心で、努力に努力を重ね勇者の座にまで登り詰めたのである。

勇者とは、戦力の要のことである。
ともすれば周囲の人間からは一目置かれる存在になるわけで、その地位を手に入れるには中半かな実力や信念では到底無理な話であった。

しかし、クリストフはそれを成し遂げた。
全ては大事な幼馴染の支えとなるためである。

「さあ、もう儀式が始まる。行かないと」

そう言って促すが、幼馴染の少女は未だ不安げな様子である。
クリストフは一つ息をつくと、あえて明るく笑いかけて見せた。

「大丈夫だって。君は俺の幼馴染なんだから」

それを聞くと、マーガレットは少しだけ安心したように微笑んだ。
その様子に、少しだけホッとする。
支えると決めておきながら、大した手助けもできない自分が歯がゆい。
名残惜しそうに袖を掴んでいた、自分よりも小さな手が離れる。
「それじゃあ……行って、来ます」
「行ってらっしゃい。……頑張って」
彼女は“祭壇”へ向かって行った。

儀式の間は神殿の最奥にあり、神殿は聖域と呼ばれる洞の入り口に繋がるように建てられている。
そして当然のごとく、神殿の最奥とは言うまでもなく聖域である洞の中である。
洞の奥には滝があり、絶え間なく澄んだ水が流れ続け、その場所で『儀式』が行われる。
祭壇とは、その場所にある滝のことである。
『儀式』は国の神官総出と魔力の主軸となる巫女によって行われ、初めて『神』が現れた時を除き、一度も成功していないと言う。
本来、『儀式』には神官達と巫女しか参加はしない。
そこを、クリストフは半ば無理矢理参加を申し出たのである。

マーガッレトは初めて『召喚』をする。不安でないわけがないだろう。
少しでも、彼女の助けになりたかった。
とは言え、勇者と言えども魔術や儀式行為に関しては魔術師や神官程秀でてはいないため、『儀式』の間にできることと言えば、邪魔にならないように脇で見ていることぐらいである。

「……それではこれより、『召喚の儀』を始めます」

緊張を帯びた鈴を鳴らすような声が、自然が作り出した壁や天井に反響する。
それと共に、この空間の魔力の濃度が急激に上がった。

「――我、魂をここに刻む者。神に清き精神(こころ)を誓う者なり――」

マーガレットが祭壇の前に跪き、召喚のための詠唱を始める。
滝の中腹に黄金(きん)色の魔方陣が浮かび上がり、姫巫女の声に反応するかのように輝いた。
そして詠唱が進むに連れ、神官達の集中は高まり、空気が魔力によってビリビリと振るえる。

――――『召喚』がこれ程とは……。

この空間に呑まれる。圧倒される。

言葉通り、この場は“聖域”であった。

クリストフは息をするのも忘れたかのように、その光景に見入っていた。

「――我らが望むは勝利。我らが嘆くは敗北。我が声に応えたまえ、その身に纏いし黒の――」

そして、それは詠唱が中盤まで差し掛かった時に起こった。

突然、魔方陣が強烈な光を放ち始めたのだ。

「！？」

「何！？」

「これは！？」

突然の出来事に、神官達が驚愕の声を上げる。
マーガレットも驚きに目を見開き、詠唱を止めてしまった。
その途端、一気に緊張が四散し、空気中の魔力が失われる。
それと共に、魔方陣は急速にその輝きを失って行く。

このままではまずい。

「マギー、詠唱を！」

咄嗟にそう叫ぶと、マーガレットはハッと我に返り、慌てて再度詠唱を始めた。
再び空間に魔力が満ちる。

しかし、先程と同様の集中は得られず、魔方陣が輝きを失うのは止まらなかった。

いくら詠唱を進めても、それが覆ることはない。
マーガレットの表情には明らかな焦燥の色が見えた。
神官達にも、絶望に似た表情が広がっていく。

「――――くそっ！」

気が付けば、クリストフは脛ほどまでの深さの滝壺に飛び込み、魔方陣へ駆け寄っていた。

「勇者殿！？」

「勇者殿！一体何を……」

静止の声が上がるのも構わず、今だ光を失い続ける魔法神に触れる。

何故そうしたのかはわからない。

そのようなことをしても、この状況を打破できないことは火を見るよりも明らかであったはずなのに。

それでも、何かしなければと思った。

そして、

触れた右手が魔方陣に吸い込まれた。

「！？」

滝に手を突っ込んだのではない。

右手はただ空気を掻くのみで、そこに水の感触はない。

まるで、魔方陣より向こう側に別の空間が広がっているような……

「クリス！？一体何をしているのです！？」

「いいから詠唱を！早く！」

突然のその行動に驚愕の声を上げるマーガレットにそれだけ言うと、クリストフはひたすら魔方陣に呑まれた右手で、得たいの知れない空間を弄る。

――頼む、まだ消えないでくれ！

魔方陣の輝きがほとんど失われた時、右手に何かが触れた。

反射的に、力強くそれを掴む。

その瞬間、再び魔方陣が強烈に光を放った。

それと同時にクリストフは何か強力な力で弾き飛ばされ、滝壺に仰向けに倒れ込んだ。

「うわっ！」

バシャン！と音を立てて水飛沫が上がる。
幸い、さほど深さはないため溺れることはなかった。

「クリス！」

マーガレットが蒼白な顔で駆け寄ってくるが、クリストフは彼女に応えることも、安心するよう微笑みかけることもできなかった。

クリストフの右手には、人の腕が握られていた。

腕は肩に続き、肩には首が続き、首は頭部に続く。

視界に、闇と見紛う程の黒が広がった。

水に浸かったクリストフに覆い重なるように、一人の黒髪の少女が倒れていた。

## ■五話（後書き）

※1／4追記　クリストフの一人称を変更いたしました。
最初からこっちのつもりだったのに……なんてこった。

## ■六話

ｓｉｄｅ：月見里　司

モノに送り出された僕は、なんかよくわからん空間に浮いていた。

いたんじゃなくて、浮いていた、ね。なんかここ地面ないっぽい。

そしてどうよくわからんのかと言うと、なんか真っ暗です。はい。

辺りを見回してみても光の一粒も見えないし、見下ろしてみても自分の体すら見えない。

そして得も言えぬ無重力感。

浮遊感とはまた何か違うんだよね。

そして、僕がそんなよくわからん空間でどうなっているかと言うと、

「ぎゃあああああああああああああああああああああ！！！！」

もの凄く振り回されていた。

それはもう、もの凄く。

いや、振り回されるという表現だと語弊があるかもしれない。
僕は別に何かに引っ掴まれて、引っ張りまわされているというわけではないのだから。

強いて言うなら、ものすごくでかい洗濯機で回されているような、はたまたジェットコースターに括り付けられて宙吊りの状態で滑走されているかのような……

ってんな悠長なこと考えてる場合じゃねーーーーーー！！

てか酔う！いやもう酔ってる！吐く！本気で吐く！僕の胃の中がポロロッカ起こす！！

モノのヤロー取り合うってこうゆうことか！それぞれの勢力が魔力で『神（僕）』を引っ張り合ってんのかよ！？

てか比喩とかじゃなくてそんなリアルな取り合い！？

僕が好きに選んでいいんじゃないの！？

それともこの状況で選べと！！？

無茶を言うなあああああああああああああ！！

……ああ、もう、マジでリバースしそう。

なんかよくわからん空間だし、いっそこのまま吐いてしまおうか。

絶えることのない三半規管の悲鳴に、僕は恥やら外聞やらその他もろもろを投げ捨ててしまおうかと、危険なことを考える。

……もう……誰でもいいから助けてくれ……

泣きたい気持ちで意識を飛ばしかけた瞬間、突然左手首を何かにガシッと掴まれた。

そして、掴まれた方向へ一気に引っ張られる。

……ハッ！！

すいません、なんかガチで意識飛んでたっぽいです。

あ、でもなんか振り回され感止まってる。

てことはどっちかに喚ばれ切ったわけか……あー、助かった……

……てゆうか、なんか足とか腰とか冷たいんだけど。

何これ、もしかしなくても水に浸かってる？

上半身はあんまり水に触れてないっぽいけど、なんか別の意味で冷

たい。
なんか金属の上にでも打ち上げられたのか？
てゆうか……

「……痛(いた)っ」

左手首がめっちゃ痛いです！

握力どんだけあんだよって力で、未だ握り締められ続けている僕の手首。

やめて！人体は壊れ物です！乱暴に扱わないでください！
てかマジで放して！痣できる！なんかホラーな痣できる！！
朝起きて発見すると思わずゾッとするような、そんなホラーな痣ができる！

と、半ば慌てたように手首が放された。

……おっ？

いつの間にか閉じていた瞼を、そっと開く。
多分意識が飛んだ時にでも閉じたんだろう。
召喚されるなり他人に白目向いた顔とか見られなくてよかった。

そんなことになれば、それこそ目も当てられない状態になっただろう。
白目だけに。

……

……さて、それはそうと、

目の前にはイケメンがいた。

それもモデルも真っ青の超絶なイケメン。
肩ぐらいの長さの金髪に、碧色の瞳。
顔立ちは恐ろしく整っており、街を歩けば十人中十人共振り返るだろう。
いやもうむしろ十人どころか三十人は振り返るかもしれない。
計算が合わなかろうが知ったことか。比喩だよ、比喩。
とにかく、「顔面差別反対！」と叫びたくなる程のイケメンがそこにいたわけだ。

……いや、僕は叫ばないけどね？

ただ、僕の視界からは肩から胸程までしか見えないが、勇者よろしく鎧っぽい物を纏ってるっぽい。

金属っぽい冷たさはこの鎧のせいか。

金属の上に薄着で乗っかってたら冷たいのは当たり前だよね。

そう、乗っかっている。

乗っかっている。

……

！？

「！！」

事実に気付いて、慌ててイケメンの上から飛び退く。

何、僕このイケメン君の上で寝てたの！？（正確には気を失ってたんだけど）

男と密着するとかマジ勘弁して！僕にソッチの趣味はないから！

そうゆうことは森の妖精さんだけで充分だと思う！

あんかけ炒飯でも食ってろ！！

パニックで思考回路がおかしくなりかけていると、いきなり平衡感覚が狂い、麻痺していた吐き気が込み上げてきた。

皆さんもご存知と思うが、回転からいきなり止まると、まだ三半規管内のリンパ液が回転しているため、脳は体が回転していると勘違いする。

そのため、回転から止まったばかりでは脳と体にズレが発生するため、普通に動くことができないのである。

つまり何が言いたいのかというと、あれだけ重力とか人間の限界と

か無視して振り回されまくった僕が、いきなりガ●ダムのごとく大地に立てるかと言うと、そんなことは到底無理なわけで。

もう無理！といわんばかりに全身から力が抜ける。

誰かが小さく悲鳴を上げたが、それすらも遠く聴こえた。

このまま倒れたら痛いだろうとか、無事な部分まで濡れるとか、そんなん考えられる状況じゃない。

が、唐突に僕の水面ダイブは阻止された。

誰かの腕によって支えられていることに気付き、目が回って焦点の合わない目を凝らす。

すると、イケメン君が強張った表情で僕を見下ろしていた。

まあ、ようやく喚び出せた『神』がいきなりぶっ倒れたらびっくりするよねー。

……あー、なんとか吐かずには済みそうかな。まだ気持ち悪いことには変わりないけど。

イケメン君は固い表情のまま僕から視線を動かすと、その視線を肩

越しに後方へ向けた。

「担架を」

## ■六話（後書き）

最近じゃ三半規管じゃなくて半規管って呼ぶんだそーね。
学校でそう習いました。

しかし習った時期はともかく、私の心は三半規管世代だと思っているので、三半規管表記で（ー'ー）＋

まあそれはともかく、やって参りました異世界。

## ■七話（前書き）

六話読み返してる途中で気付いたんですが、二話あたりの司君がなんか固い（汗

六話では大分砕けてるけど、あの時はまだキャラが扱いきれてなかったからなぁ…

でも書き直すのもアレなんで、このままで。

しかし今回はまとまりがなさ過ぎる。

誰か文才をください。

## ■七話

「……あー、いいよ、担架とか……ちょっと休めば大丈夫だと思うから」

未だにぐらんぐらん回っている頭で、イケメン君に静止の声をかける。

単に国家レベルの取り合い合戦のせいで酔ってるだけで、別に具合悪いとかそんなんじゃないし。
いや、めっちゃ気持ち悪いけどね？
未だにリンパ液がマ●カーでうっかりバナナを踏んでしまった時のごとく回転しまくってるけどね？

とりあえず担架で運ばれる程一大事ってわけでもなかったわけなんだけど、イケメン君は渋い顔のまんまである。

「しかし、とても大丈夫そうには……」

「いや、大丈夫。目ぇ回ってるだけ」

吐き気を堪えて、精一杯平常状態を装ってみる。

てゆうか、とりあえず今はどこかに座りたいんだけど。
支えられているとは言え立っているのはつらいし、何よりあんまり密着していたくない。

男が嫌いってわけじゃないが、ちょっとトラウマがあるから正直密着するのはご勘弁願いたい。

座りたい旨を伝えると、イケメン君は何やら謝罪の言葉を口にした後、若干身を屈め、僕を支えていない方の腕で僕の膝裏あたりをひょいと持ち上げた。

……説明は不要だろう。

イケメン君の右手は僕の肩に。左手は僕の膝の裏に。
そして現在僕は、重力を無視した状態にある。

女性なら憧れる人は憧れる、『お姫様抱っこ』である。

……どうしてこうなった。

どうしてこうなった！！

どうしたいのかわからないー。

ぶっちゃけ意外に快適ぃー。

ありをりはべりいまそがｒ

……やべ、あまりのことに現実逃避してた（汗

あまりのことにリアクションが取れずにいる僕の気も知らず、イケメン君は悠々とした足取りで水辺から上がる。

うおおおおおおやめろおおおおおおおおお！！

下ろせ！今すぐ下ろせ！堕ろせ！じゃなかった、いいから僕を下ろせええええ！！

僕に触れるな姫抱きするな僕にそうゆう趣味はねえええええええええ！！

完全にパニックを起こして一ミリすら動くことができないでいると、イケメン君に壁に寄りかかって座らせるようにして下ろされた。

……た、助かった……

眼鏡がなければ即死だったな。
眼鏡が何を防ぐのかとかなんで即死なのかとか全くわからんけど。

とりあえず、イケメン君から解放されて盛大に息をつく。

イケメン君に悪気がないのはなんとなくわかるけど、いきなり男を姫抱きするとゆう行為にはいささか正気を疑うぞ？
さてどう言ってやろうかと思案していると、おもむろにイケメン君は膝を折り、頭を下げた。

「申し訳ございません、『勝利の神（ベクトリア）』様」

……ベクトリアって誰ぞ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

side：王女マギー

その少女は、まるで夜空のような黒い髪をしていた。

彼女の纏ういささか手足の露出の高い衣服は、髪と同じく黒。
同じく黒の眼鏡をかけているが、この国にはないデザインである。
そして、肌はまるで生まれてから一度も外に出たことがないかのように、少しの荒れもない。

マーガレットは、目を伏せクリストフの上に横たわるその少女が、この世の者ではないと確信した。

「……痛(いた)っ」

少女から、呻くような声が零れる。

その声に、いち早く呆然自失から立ち直ったクリストフが、慌てて少女を掴んでいた手を放した。

もしも『神』の不興を買ってしまったら、『神』はあっさり自分達を見捨てるだろう。
見捨てられるだけならまだしも、今の状況では『神』が人間(我々)側に刃を向ける可能性の方が高いのだ。

最悪の結果を想像して冷や汗が滲む中、少女が伏せていた瞼を開く。

それは闇を刳(く)り抜いたかのような、黒。

否、刳り抜いたというよりも闇そのもの凝縮したかのような、漆黒。

宝石のような瞳、などという表現では陳腐過ぎる。

宝石のような透き通った美しさとは全く違う。

いくら目を凝らせど先には何も見えない、呑み込まれるような、吸い込まれるような、思わず恐怖すら湧き起こるような神秘的な美しさ。

彼女のかけている眼鏡のレンズ越しでなければ、神官から失神する者が出たかもしれない。

心がざわめく。

彼女が『神』だと、魂が叫ぶ。

誰もが息を飲み、彼女の醸(かも)し出す得も言えぬ雰囲気に、一切の身動きが取れなかった。

そして、その静寂を破ったのは彼女自身だった。

「！！」

弾かれるように、クリストフから飛び退く少女。
『神』を怒らせてしまったかと緊張したが、どうやらそうではないようだ。
彼女の顔には、明らかな狼狽の色が浮かんでいる。
心なしか、顔色もあまりよくない。
ふいに、彼女の体がグラリと傾いた。
「！」
起こるであろう事態を想像して、思わず悲鳴を上げる。
それを見たクリストフが跳ね起きるようにして彼女に駆け寄り、咄嗟に彼女を支えて水面に倒れ込むのを阻止した。
ホッと息をつくが、安心している暇はない。
クリストフは少女を支えたまま、強張った顔でマーガレットと未だ呆然としている神官達に振り向く。
「担架を！」
その声にようやく正気を取り戻した神官達が、担架を用意しようとざわつきながら踵を返す。
しかし、その空気を崩したのは、またしてもその少女だった。
「……あー、いいよ、担架とか……ちょっと休めば大丈夫だと思う

から」

その場にいた全員が、一斉に少女に注目する。

しかし少女はその視線を全く気にする様子はない。
いや、気にする余裕もないのだろう。
目は虚ろで焦点は合わず、顔は蒼白以外の何物でもない。

「しかし、とても大丈夫そうには……」

クリストフが、若干困惑を滲ませた声で言う。

本来、『神』に物申すなど考えられないことなのだが、彼にもそれなりの葛藤があったのだろう。
それぐらい、彼女は“大丈夫”には見えなかった。

「いや、大丈夫。目ぇ回ってるだけ……ごめん、ちょっと座りたい」

声だけでも平常を装う少女に、クリストフは少し頭を下げるだけの緊急時に使用する簡略敬礼を取る。

「申し訳ありません。失礼致します」

彼はそう言うと、身を屈め少女を抱え上げた。
そして、壊れ物でも扱うかのように慎重に水から上がる。
壁際に下ろされると、彼女はホッとしたように息をついた。

しかし、マーガレットの胸中はとても穏やかではなかった。

わざわざ『神』が喚(よ)び出しに応じてくれたと言うのに、負担をかけさせてしまっていては、人間側(こちら)にとって好ましくない結果を招きかねない。

ただでさえ、長年『召喚』に応じなかったのである。

それがついに現れたということは、何かそれなりの理由があると考えられた。

機嫌を損ねてはいけない。

不興を買ってはいけない。

『神(彼女)』はいつでも人間側(我々)を地に捻じ伏せることが出来るのだから。

恐らく同じ心中であろう幼馴染は、彼女に跪き、深く頭を下げた。

「申し訳ございません、『勝利の神(ベクトリア)』様」

そして、その場にいた全員が、『神(彼女)』に跪いた。

## ■七話（後書き）

今回あんまり面白くない…
誰か文才とまとめる力をください。

『どうしてこうなった』のくだりは、う／ど／ん／ゲ／ル／ゲ様の楽曲「どうしてこうなった」の歌詞から。
（※スラッシュは検索よけです）

## ■八話

side：月見里　司

……なんかもの凄い人数の人達に頭を下げられているんですが、僕は一体どうすればいいのでしょうか。

イケメン君が何やら跪いたと思ったら、その場にいた全員が事前に打ち合わせをしていたかのごとく、一斉に跪いたのだ。

身分に上下の少ない日本人にとっては、その光景は軽くホラーである。

それにしてもすっごい息ぴったりだなこの人ら。

長縄とか三十人三十一脚とかやったら、結構いい線行くんじゃないだろうか。

人数は三十人どころの話じゃないけど。百人ぐらいいるけど。

……それにしても、誰も喋らない。

もしかして、「面を上げーい」とか言わなきゃならない系？

それはなんか現代人としてよくない気がするんだけど、するべきなのかこれ。

この人達は僕に一体何を求めているんだ。神か。それとも殿か。むしろ殿なのか？

てゆうか正直この場の空気に耐えられません。
僕が『神』から『殿』へのジョブチェンを本気で悩み始めた時、イケメン君がようやく火口を切った。

「恐れながら申し上げます。『勝利の神（ベクトリア）』様に対する数々のご無礼をお許しください。我々ベルベドール国国民一同、貴方様がおいでになるのを心よりお待ちしておりました。『勝利の神（ベクトリア）』様のご不興を買ってしまい、真に申し訳ございません。如何（いか）なる罰もお受けします。どうか、我々にお力を」

イケメン君がスラスラとそれっぽい言葉が並べ立てていく。
いやー、宗教とかがちゃんとしてる国ってさすがだね。
宗教の自由な日本人としては、咄嗟にこんなスラスラ挨拶みたいなこと言うのなんて多分無理だし、内容だって「それっぽい」としか説明しようがないし。

てゆうか開口一番に謝罪っスか。
数々の無礼って、この人達何かしたっけ？
個人的にイケメン君のお姫様抱っこにはビビッたけど、他なんかあった？
イケメンである罪とか？いや、僕は別にイケメンが憎いわけではないけども。

……さて、イケメン君言うだけ言ってまた黙っちゃったんだけど。
さすがにこれは何か言わないとマズイよなぁ……

下手にそれっぽいこと言おうとしたら絶対自爆そうな気がする。もしくは誤爆。

例えば、大真面目な顔で

「今回のことは目を瞑ろう。しかし以後このような真似をすれば……っは……し、静まれ……俺の腕よ……怒りを静めろ！！うおおおおおおおお！！」

とか言ぎゃあああああああああ痛い痛い痛い痛い！！

自分で考えといてなんだが、とりあえず強そうに見せとけって魂胆が見え見えだろ！

どこの邪●眼だよ！アイアムノット中二病！！ワタシは正常！

……駄目だ、無理にそれっぽいこと言おうとしたらその場で爆死できる。てゆうか、する。

とりあえず無難に行こう。そう無難に。

てか僕は神（らしい）から、多少のことは勝手に向こうが補正してくれるでしょ。

「えーと……あの、無礼とか、その、別に思ってないんで、顔を上げてもらえませんか？」

特に何も考えずに言ったら、なんか挙動不審な人になってしまった。

おそるおそる、といった体でこの場にいる百人強が顔を上げる。

……あれ、見える限りでも全員が驚きの表情を浮かべているのは何故だろう。

大勢の人間に見られていることに今更ながら居心地の悪さを感じ、なるべく誰とも目が合わないよう視線をそらしながら、少し姿勢を正す。

しかしずっとそうしているわけにもいかないので、自分の一番にいるイケメン君に、そろりと目を合わせてみる。

表情は変わらずともイケメン君の顔が青ざめたような気がするんだけど、やっぱり神と対面するってのは緊張すんのかね。

僕はほぼ無宗教に近い仏教徒だったから、あんまり神様を崇めるって意識がないし、神と言うと画面の向こうとかで散々見てきたから、あんまり有難みがなかったりする。

そもそもリアルで始めて会った神が神（モノ）だったわけだし、あんまりどころか有難みもへったくれもなかったりする。

価値観の違いって怖いネ☆

「あの、いくつか訊きたいんですけど、ここは人間側ですか？」

周りにいる人達はどう見ても人間にしか見えないけど、もし魔族の外見が人間と大差ないのだとしたら、一概にもここは人間の側とは言えない。

イケメン君がまた頭を下げ、緊張を帯びた声で答える。

「は、ここは我々人の大陸『アスタロッド』に存在する、王国『ベルベドール』にございます。そしてここは国の神殿の最奥にある『召喚』を行うための『儀式の間』。『勝利の神（ベクトリア）』様に『召喚』に応じていただき、我々一同感激しております」

へー、人間の王国はベルベドールって言うんだ。

とりあえずここが人間側だってことはわかった。

あと話の流れ的にベクトリアって僕のことだよね？他に思い当たらないし。

なんか女の人みたいな名前だなー。ヴィクトリアみたいな。確かイギリスの女王様の名前だったはず。

ベクトリアは多分神様の名前なんだろうけど。

それにしても固いなー、このイケメン君。

向こうにしてみれば当然なのかもしれないけど、こちらとしてはまだ自分が『神』っていう自覚はないわけだし、あんまり崇められてもむず痒いとゆうか、居た堪れないとゆうか。

ぶっちゃけ恥ずかしいです。

価値観の違いって怖いネ☆

「あー……時にイケメン君」

「は……え。あ、わっ、私ですか？」

おお動揺しとる動揺しとる。

まあ、『神様』にイケメン君と呼ばれるとは思わなかったのだろう。

「えーと、お名前は？」

「ベルベドール王国勇者、クリストフ・ミハエラ・シュヴィエと申します」

……クリストフ。

「……賢者（サヴァン）？」

「え？」

「あ、いや……何でもないデス……」

しかしイケメン君はやっぱり勇者だったか。

いかにもな見てくれしてるしね。

「名乗るのが遅れてしまい、申し訳ありませんでした。そしてこちらが、我がベルベドール王国の第一王女にございます」

イケメンで勇者で賢者（サヴァン）なクリストフがそう言うと、少しだけ離れたところで膝を折っていた長い銀髪の女の子が、既に下げている頭を一層深くした。

「ベルベドール王国第一王女兼姫巫女、マーガレット・ティオ・エリザベス・ベルベドールでございます。権力に身をやつした卑しい身ではございますが、恐れ多くも我が国の代表として、『勝利（ベクトリア）の神』様のご来訪を歓迎させていただきます」

……マーガレット……エリザベス……ベル……ベ……

「……ペルソナ？」

「はい？」

「何デモナイデス」

二次元のキャラクターの名前しかないのか、この世界は……

しかもティオって部分はまさかテオ●アか？いや、さすがに無理があるか。

そもそも、この世界の住民がペル●ナとかサンホ●とか知ってるはずないし。

てゆうかこの王女様今凄いこと言わなかったか？

「権力に身をやつした卑しい身」とか、王族の言うセリフじゃねぇだろ。

あれかな、神の前では権力は欲の象徴とかなんだろうか。

それにしても、王女さんもかなりの美人さんだなー。

アクアマリンみたいな綺麗な水色の目が、驚きと疑問の色を浮かべてこちらを見つめている。

さて、イケメン勇者君と美人王女さんの名前は聞いたから、こっちも名乗らないとね。

僕はよっこいしょとその場に立ち上がる。
目が回るのは治ったし、吐き気も大分治まっている。

「えーと、人間側の皆さん始めまして。ベクトリア？の、月見里（ヤマナシ）司（ツカサ）です。ちなみに司が名前です。この世界に関してはわからないことだらけだと思いますが、よろしくお願いします」

そう言って、頭を下げる。

うん、礼儀を重んじるのは日本人の美徳だよね。

それを見て慌てたのはクリストフ達跪き隊（たった今命名）の皆さん。

「な！そんな恐れ多い！どうかお顔をお上げください『勝利（ベクトリア）の神』様！」

「おやめください『勝利（ベクトリア）の神』様！貴方様が我々にそこまでなさる必要はございません！」

「お許しを！どうか罪深い我らにお許しを！お許しを！」

「お許しを『勝利（ベクトリア）の神』様あああああああ！」

……ちょ、なんかこれ僕が悪者みたいじゃんか。
なんか泣き崩れる人までいるし。リアルにｏｒｚのポーズになってるよ。

僕としては普通に挨拶しただけなのに……信奉心って怖ぇ。

あーもう、しょうがないなぁ。

「とりあえず皆さん落ち着いてください。僕が頭を下げたのにはちゃんと理由があるんです」

とりあえず理由をこじつけて落ち着かせることにする。

僕が喋り始めた途端、水を打ったように静かになる場。

……うぅ、慣れないなぁ。

「僕をここへ引っ張り込んだのは貴方ですよね？」

「は、はい……あ！」

クリストフに向けてそう問うと、クリストフは僕の左手に視線を向け、ざっと青ざめた。

うん？と思って左手に視線を落とすと、左手首にはくっきりと手形の痣が浮かび上がっていた。

あちゃー痣んなっちゃったか、と思っていると、クリストフが知り合いの刑事さんに助手の正体がばれた時の某大食い女子高生探偵ばりに洗練された土下座をした。

いや、そんなんと比べちゃ悪いんだろうけど。

「大変申し訳ございません！！如何なる罰もお受けします！どうか、この国の民ばかりは見捨てないでください！」

うおぅ、びっくりした（汗

僕としてはこれぐらいどうってことないし、モノにもらった能力で治せばいいんだけど、ここじゃあちょっとでも神様に失礼があると、なんかもうアウトっぽい。

「いや、大丈夫ですから！別に見捨てませんし、罰とかもないですから！顔上げてください！」

そう言っても、クリストフは顔を上げない。

……しょうがない、このまま話進めよう。

「貴方が僕を助けてくれたんですよ」

クリストフが、え、と声にならない声を上げ、顔を上げる。

「ここに来る前に、僕は人間側と魔族側の双方の召還に引っ張り合われる形になって、かなりのダメージを受けていたんです。それを、貴方がここに引っ張り込んで助けてくれたんですよ」

だから僕の腕は気にしないで、と、笑いかける。

とりあえず、嘘は言ってないはず。

全部に確信があるわけじゃないけど、大方こんなところだろう。
ダメージも実はそんなに重いもんでもなかったけど、少しくらいの誇張はあっても悪くないと考えた。

クリストフはというと、本当に落っこちるんじゃないかと思う程目を見開いて、ゆっくりとうつむいて祈るように手を組んだ。

とりあえず、土下座はやめてくれたようで何よりです。

「……なんと……慈悲深い女神様でありましょうか……」

……パードゥン？

「……ねぇ、今何つったよ？」

「え？」

いきなり口調の変わった僕に、クリストフが驚いて顔を上げるが、そんなこと構うもんか。
聞き捨てならん言葉が聞こえたぞ今。

「いや、だから、何つったよ？って」

「えぇと……なんと慈悲深い……」

「その次」

「女神様でありましょうか、と……」

ここでもかあああああああああああああああああああ！！

僕は盛大に溜息をつきたくなるのを我慢して、クリストフに向き直る。

そしてなるべく平静を装いつつ、自分を指差して見せる。

「僕、男」

## ■八話（後書き）

ようやく勘違いを正せた司君。
お疲れ様です。

## ■九話（前書き）

皆さん明けましておめでとうございます。
新年明けてからの初めての投稿ですね。

今年の祭日や来年の元日は何か企画ができたらいいなと思っております。

至らない点は多々ありますが、今年もよろしくお願いします。

## ■九話

僕は子供の頃から、ちょくちょく女の子に間違えられた。

母親譲りのやわらかな顔の輪郭に、マッチ棒が乗るくらいの長さの睫毛。
どれだけ工夫しようが苦労しようが、ショートヘアにしか見えない癖のある髪。
日焼けをしない体質らしく、どれ程日に当たろうとも一時的に皮膚が赤くなるだけで、すぐ元に戻ってしまう。

これだけ聞くと、どう見ても女です本当に（ｒｙ）だが、それでも丸っきり女顔というわけではないのだ。

成長するにつれて身長も伸び、今では１７０ｃｍを軽く越えている。
服だってちゃんと男物を着込んでるし、変声期にスルーされるなんてこともなく普通に地声は女性より低い。

お陰で今は女性に間違われることは格段に減った。

だがしかし。

身内や友人に言わせれば、服装や顔の角度によってはどう見ても女にしか見えない時があるらしい。

お陰様で生涯において、女と間違われて告白された回数、数回。
電車やバスで痴漢にあった回数、数回。
男にナンパされた回数、十数回。
友人に「え、お前男だよね？」と言われた回数、数十回。
他にも、高校時代のクラスメイトには「月見里（ヤマナシ）が女だったら絶対口説いてる」とか言われたり、友人の彼女が痴漢に遭ったとかで無理矢理囮捜査に参加させられたりとか、あとは……

……やめよう。芋弦式にトラウマが……うぇ（泣）。

ともかく、そんなこんなで僕はちょくちょく女性に間違われてきたわけだが、僕は極力気にしないことにしている。
むしろ気にしたくない。いや、気にしたら負けだと思っている。
むしろ働いたら負けだと（ｒｙ）

それはともかく。

「大っっ変！！申し訳ございませんでいたあああああああああ！！！！」

再びイケメン(クリストフ)君の五体投地タイム。

だからさっきから気にしなくていいって言ってるじゃん！
むしろこっちが気にしたくないって言ってるのに、それすら許してくれないのかお前は！！
これが今時の人の話を聞かない若者か！恐ろしいな！

クリストフは相変わらず床に頭着けたまんまだし、その他の人達も一緒になって頭下げてるし。
てゆうかなんか皆さん小刻みに震えてない？
一応『神』として扱い受けてるとはいえ、なんかこう……うん、凄くいたたまれないんデスケド。

「いやいやいや、だからね？気にしないでいいって言ってるじゃないですか！顔上げてくださいって！お願いですから！気にしてませんから！もういいですから！ほらさっさと顔上げる！むしろ上げろ！いいから顔上げろ！勇者がそんな惨めでいいのか！哀しくないのか！それでお前の使命がまっとうできると思ってるのか！立て！立つんだジョー！！いや、立ってくださいお願いします！！！」

とにかくこの状況を放置したらとんでもないことになりそうなので、思いつくことを片っ端から口に出してなんとか現状を打破しようと試みる。

てゆうか何言ってるんだろうねぇ僕も！

言いながら思わずクリストフの肩を掴んで揺さぶると、彼は真っ青な顔に驚きと畏怖の表情を貼り付けて顔を上げた。

やれやれ、こうも信仰心が強過ぎると厄介なことこの上ないねチクショウ！

てゆうかこれだけ顔面真っ青にしてて、脳貧血とか大丈夫なのか。

「……申し訳……ありません」

今にも死にそうな顔で謝罪を口にするイケメン勇者。

あーもー、いい加減しつこいなこれ。

「いやもう、そうゆうのいいんで……いい加減この惨事をどうにかしてください。状況進まないでしょ。それとも、本格的に見捨てられたいんですか？」

呆れを含ませた声で、脅しをかけてみる。

するとクリストフは、ただでさえ顔色が青いというのに、重ねて激しく動揺する。

……なんか僕、この人心労で殺せそうな気がしてきた。

「そっそんなことは……！申し訳ありません、すぐに王都への準備を！」

慌てて振り返って指示を飛ばすクリストフ。

指示された他の人達は、慌しく、とゆうか一秒でも早くといった感じに片付けやら支度を始めた。

……やれやれだ。

「あ、そうだ。重ねて悪いけど、何か羽織れる物借りられますか？」

現在の僕の装備。

E　黒のTシャツ
E　黒の短パン
E　眼鏡

以上。ちなみに裸足。

僕が死んだ時、元の世界は六月の頭だったためこの格好で事足りたのだが、ここはだいたい秋ぐらいの気温な上、喚ばれるなり水に濡れる羽目になったため、この格好のままでははっきり言って肌寒い。

とゆうかこの格好は寝間着同然なので、あんまりこのまま人前にいるのは正直はばかられる。

まあ、向こうはそんなのわかんないだろうけどさ。気分的にね。

「！　申し訳ありません！気が回らず」

「いや、だから謝罪はもういいんで。てゆうかそれぐらいで一々怒りませんし」

自分が彼らにとって重要人物（神だけど）だというのは承知しているけど、ここまでくると正直うんざりしてくる。
口を開けば謝罪だし。うちの国のお偉いさんにも少しは見習ってほしいね！
そのうち僕は息をするだけで謝られるようになるんじゃないだろうか。

あ、てゆうか頼まないでモノに貰った能力でなんか出せばよかった。

「何か羽織る物を！」

「は、羽織る物でございますか？」

「何も用意しておりませんが……」

ありゃ、なんか頼んだ物ないっぽい？

まあ丁度いいか、自分出し……って、皆さんの顔がまたもや青ざめていくんですが？
僕はこの人達の顔面の血流を本気で心配するよ。

……ああもう、この世界で誰かに物を頼むの極力控えよう。
でないとここの人達の胃袋を蜂の巣にして回るような事態になりかねない。

僕がこの世界で生きていくための新たな決断をしていると、マーガレットさんが何やら駆け寄ってきた。

「これを！」

そしておもむろに白魔道師よろしく羽織っていた白いフード付きマントを脱ぎ去ると、それをバフッと僕に被せた。

「わっ」

おぅ、なんだなんだ。

半ばもがくように頭から被せられたマントから顔を出す。

あ、なんかこのマントいい匂い。マーガレットさんの香水かな？

「私などが着ていた物で申し訳ありませんが、王都に着くまでの間、どうかこれでお許しください」

そう言って頭を下げるマーガレットさん。

おお、周りの皆さんが目に見えてホッとしてるよ。

お前ら王女様の気転に感謝しろよー。

それはそうとして、この場を治める面でも寒さを凌ぐ面でもこれは有難い。

「ありがとうございます」

素直に礼を言うと、マーガレットさんは恐れ多いと言わんばかりに

頭を下げた。

「そんな、恐れ多い。私などにはもったいないお言葉にございます」

言わんばかりってか実際言ったけど。

さて、向こうも準備ができたみたいだし、いざ王都へ。

## ■十話

そんなわけで、今僕は馬車に揺られています。

自動車とか電車とかに慣れた現代っ子としては少々乗り心地に不安があったけれど、いざ乗ってみるとゴトゴトと揺られながら移動するのは思いの外楽しかった。

まあ、乗り物酔いする人にとっては最悪の乗り心地なんだろうけど。

だがまあ、今はそんなことどうでもいい。

そう、どうでもいい。自分で上げといてなんだが。

皆さんは、馬車と聞いてどんな物を想像するだろうか。

モノから中世ヨーロッパ風の世界だと聞かされていたため、僕は昔のド●クエに出てくるような、言っちゃなんだが物置のような質素な内装の馬車を想像していたのである。

ところが、その予想は見事に裏切られた。

「……」

馬車の中はなんとゆうか、まんま“部屋”だった。
窓には人目を避けるためか厚めのカーテンがかけられており、テーブルやら椅子やらの家具もそろっている。驚くことにベッドまであった。
揺れるせいか置物的な物はなかったが、床はピカピカに磨き上げられているし、広さは僕が住んでいたマンションのワンルームより広い。

……ここはどこのホテルですか。

そして今この部屋には、僕の他に護衛のための勇者（クリストフ）、そして喚んだ張本人である姫巫女（マーガレット）さんがいる。

マーガレットさんは椅子に、クリストフは扉の横に佇み、「自分達は空気とでも思っていてください」と言わんばかりに微動だにしない。

しかし、なんと言うか、まあ……

空気重っ！！

初対面の人間が同じ空間で黙り込んでいることの空気の重さったら！

僕は現在マーガレットさんのマントを羽織った状態で、びっくりす

るほどふかふかしたベッドに腰掛けている。
本当このふかふか具合にはびっくりした。干すのを面倒臭がったうちの煎餅布団とは大違いでした。
揺れるの無視してここで一泊してぇ。

この空気から逃れる手として、このまま寝てしまうのもありではある。

だがしかし、僕はこの重苦しい空気を無視して眠りにつくことができるのか。

答えはノーだ！

ならばこの空気を打破するべく、行動を起こさねばならない。

すなわち、今ここにいる二人と交友を深めることである。

てゆうか、今後のことを考えると、早々に味方を作っておいた方がいいよなぁ……

ちらと二人に視線を向けると、相変わらず微動だにしていない。

声かけづらっ！

いや、頑張るんだ僕！話しかけろ！諦めたらそこで試合終了ですよ！！

「あ、あのー……」

つかさ　は　ゆうき　を　だして　こえ　を　かけた　！

「は、なんでしょうか『勝利の神（ベクトリア）』様」

しかし　なに　を　いうか　かんがえて　いなかった　！

うおおおおおおおおおお駄目じゃねえかあああああああああああ！！

声をかけることに必死で何言うか考えてなかった！

考えろ！考えるんだ！必ず突破口はあるはずだ！

「えーと……王都まであとどのくらいで着きますか？」

なんとか話題を捻り出す。

よし！よくやった僕！頑張った僕！

この程度で頑張ったの？とか言わないで！！

「あと五時間程かと」

クリストフが答える。

五時間かよ！長っ！

しかし、自動車や電車がないであろうこの世界にしてみれば、これが普通なんだろうな。

そう考えると元の世界スゲー。

魔法はなくてもテクノロジーが発達してるってゆうのも、もうテンプレだよね。

「そうですか。わかりました」

それまで暇だなぁ、と小声で一人ごちる。

本心は、それまで（この空気は）つらいなぁ、なのではあるが。

何か話せる話題はないだろうか。

「『勝利の神（ベクトリア）』様」

「はい？」

お、なんか向こうから声かけてきた。

「我々に敬語は不必要です。我々は一介の人間に過ぎませんが、『勝利の神（ベクトリア）』様は神で在（あ）らせられます。神が人間に敬意を払うなど、とても恐れ多いことにございます」

そう来たか……いや、予想できなかったわけじゃない。

むしろこれはチャンスだ。

敬語だのなんだのの話で現地の人と親交を深めるのは、異世界トリップ物でよく使われる手でありながら、中々使える手段でもある。いや、使えるからよく使われるのだろうが。

さて、そんでは二人をこちらに引き込むとしましょうか。

「別にそれは構いませんけど……それじゃあ、お二人とも僕のお願いも聞いてくれませんか？」

僕の言葉に、話に加わっていなかったマーガレットさんも僕に目を向ける。

「は、なんでしょう」

「二人とも、僕に対する敬語をやめてください」

二人の目が、驚愕に見開かれた。

「そ、そんなことできません！」

「二人が敬語やめないなら、僕もこの口調を変えるつもりはありません」

「しかし……！」

まあ、信仰心の深い人からしたら当然の反応なんだろうね。

ここで「神命令です。拒否権は無し！」とか言ってもいいのだが、

少々訊きたいことがあったので、ついでに訊いてみることにする。
やや国家レベルでの込み入った話になってしまうが、味方に引き込むのならこれぐらい腹を割った方がいいと思った。
「それじゃ訊きたいんですけど、二人ともベクトリア(僕)のことどんな風に思ってます？」
「どんな……とは」
「ベクトリア(僕)が現れたことにより、この世界にどんな影響を及ぼすと思うのか。以前ベクトリアが現れた時、人間と魔族の戦争はどうなったと聞いてますか？」
僕の問いに、クリストフが律儀に答える。
「以前『勝利の神(ベクトリア)』様がご降臨なさった時は、人間側と魔族側の、それぞれお力をお貸しくださった側の勢力を勝利へと導き、戦いの勝敗を意のままに操ったと……」
どうやらモノが言ったことは本当だったらしい。
いや、信じてなかったわけじゃないけど、いきなりあんな話されれば、ねぇ？
「なら、ベクトリア(僕)が人間側についたら、どうなると思いますか？僕が人間側(こちら)に来た時、お二人ともどう思いました？」
「『勝利の神(ベクトリア)』様が我々人間にお力をお貸ししていただけるのであれば、人間側(我々)はこの戦いに勝ったも同然。魔族勢力に勝利するため、

我が国の国王も国民も『勝利の神（ベクトリア）』様がご降臨なさるのを心の底から願っておりました」

「同じく。『勝利の神（ベクトリア）』様のお力により国民が救われるのであれば、これ以上に望ましいことはありません」

「まあ、そうだろうね」

おっと、うっかり口調が戻ってしまった。

まあ、いいか。

自分で変えないとか言っておきながら何だけど、少し穏やかさを欠いた話し方をした方が、内容的にいいのかもしれない。

向こうからしてみれば、下手をすれば『神』の機嫌を損なうどころじゃない話なのだから。

二人は僕の質問の意図が理解できていないようで、困惑したような顔をこちらに向けてくる。

「つまりね、『神（僕）』は戦争の道具ってわけ。そうでしょ？」

世界史の勉強をしていれば、嫌でも理解する。

元の世界で、どれだけ“偉大な神の名の下に”戦争が行われてきたか。

“偉大な神の名の下に”どれ程の殺戮が行われていたか。
神への信仰のない身であるから、はっきりと言える。
宗教は、政治の道具である。

どんなに非道な行為も、“神の名の下に”あれば、正当化されてしまう。

もし、『神僕』が人間側に味方したとして、それに驕り昂った人間が不必要に魔族を虐殺しても、全ては“神の名の下に”よるものであると、『神』に味方された自分達が正しくないはずがないと、そう言って全てを正当化してしまうだろう。

さらに言うと、戦争が終わったあと『神』の存在を傘に着て、魔族にもっと酷いことをするかもしれない。

まあ、これらは魔族側にも言えることなのかもしれないが。

つまり、『神僕』は道具。
自分達が勝つための。自分達の行動を正当化するための。

「何をおっしゃるのですか！」

マーガレットさんが、弾かれたように椅子から立ち上がる。

「『勝利の神（ベクトリア）』様は道具などではありません！」

「でもそうでしょ？例えば僕が魔族側についたとして、魔族の軍が民間人にまで虐殺を行っても、『神に味方された自分達が正しくないわけがない』って言えば、それは本当に正しい行為になっちゃうよ。それに僕がついたら勝利は約束されたも同然みたいだからね。魔族が戦争に勝ったあと、人間の領土を荒らしたり人間を奴隷にしても、一言『神の名の下に』と言えば全て正当化されるよ。元々、正義なんて武力による勝敗で簡単に変わるし」

「それは魔族側の話で……！」

「人間側がそれをしないなんて言い切れるの？」

「……ッ！」

反論できずに黙り込むマーガレットさん。

クリストフも言う言葉が見つからないようで、絶句の表情で僕を見つめている。

とりあえず、二人がしないと言い切るような阿呆じゃなくてよかった。

言い切ってたら軽く蔑んでたわ。

国の重要人物が何甘いこと言ってんのかと。

「人間の全員が全員そんなことをするとは僕も思ってないよ。でもね、『神』は人より上にいて、崇められるものでしょ。そんな便利なものを、ちょっと悪い方向に頭が回る人が利用しようと思わないわけないじゃない。少なくとも、僕がここに来る前いた世界ではそ

うだった」

あくまでだったと思いたいけどね。

それでも、ちょっとしたことで簡単に現状は崩れ去るだろうけど。

「だからさ、味方を作っておきたいんだよね」

そこで、僕はようやく本題に入る。

本当はもっとあれこれ言ってもいいんだけど、これ以上この二人に言っても仕方ないだろう。

「僕が『神』だからとか、そんなの関係なしに信頼できる味方をね。私利私欲に走るような奴にいいように使われたくなんかないし、かと言って僕にはこの世界に来たばかりで味方はいない。人間領を出れば済む話なのかもしれないけど、そうやって逃げ続けたって何かが解決するわけじゃない」

モノにはどっちにも味方しない選択肢もあると言われたけど、いきなりそれを選択するようなことはあまりしたくない。

今まで人として生きてきた以上、誰かと関わりを持っていたいのである。

「難しいかもしれないけど、もう少し歩み寄ってほしいなー……この世界で、一人きりはつらいよ」

言うことは言った。

あとは相手のリアクションに合わせて対応していけばいい。

さて、どんな反応をしてくれるかな。
まあ、二人ともいい人みたいだからそんなに悪い反応はしな……って、何故にマーガレットさんは泣いているのでしょう。
え？え？なんで？僕なんかまずいこと言った？（汗）
理由はわからないけど、女性を泣かせてしまったのは非常に心苦しい。
てゆうか、慣れてないから焦る。マジで焦る。
え！？マジで僕なんかした！？
本当のことを言ったつもりだったんだけど、ちょっと意地悪し過ぎた！？
テンパッた時の癖で動けずにいると、マーガレットさんはボロボロ涙を零しながら僕に近付いて、そっと僕の手を取った。
「……大丈夫です『勝利の神（ベクトリア）』様。私達がついています。私達は決して貴方様を裏切りません」
続いてクリストフが扉から離れて近付いてくると、おもむろに僕の前で膝を折った。
「我々を信頼してくださり、有難うございます。どうかご安心ください。『勝利の神（ベクトリア）』様は、必ず私がお守り致します」
……あの、なんか二人ともすごく真摯な視線を向けてくるんですが。
僕こんな目で見られるようなこと言った覚えないんだけどなー……

「ど……どうもありがとう」

予想外の反応にしどろもどろになりながらそう言うと、二人はしっかりとした眼差しで僕を見返してくる。

なんかよくわかんないけど、お礼言っても恐縮されなくなったからいいか。

この時二人が、僕の想定していなかった決意を固めていたことに、僕が気付くことはなかった。

## ■十話（後書き）

なんか今回シリアスになりましたね。

二人が固めた決意に関しては後日。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4837p/

Vectoria

2011年2月25日01時20分発行